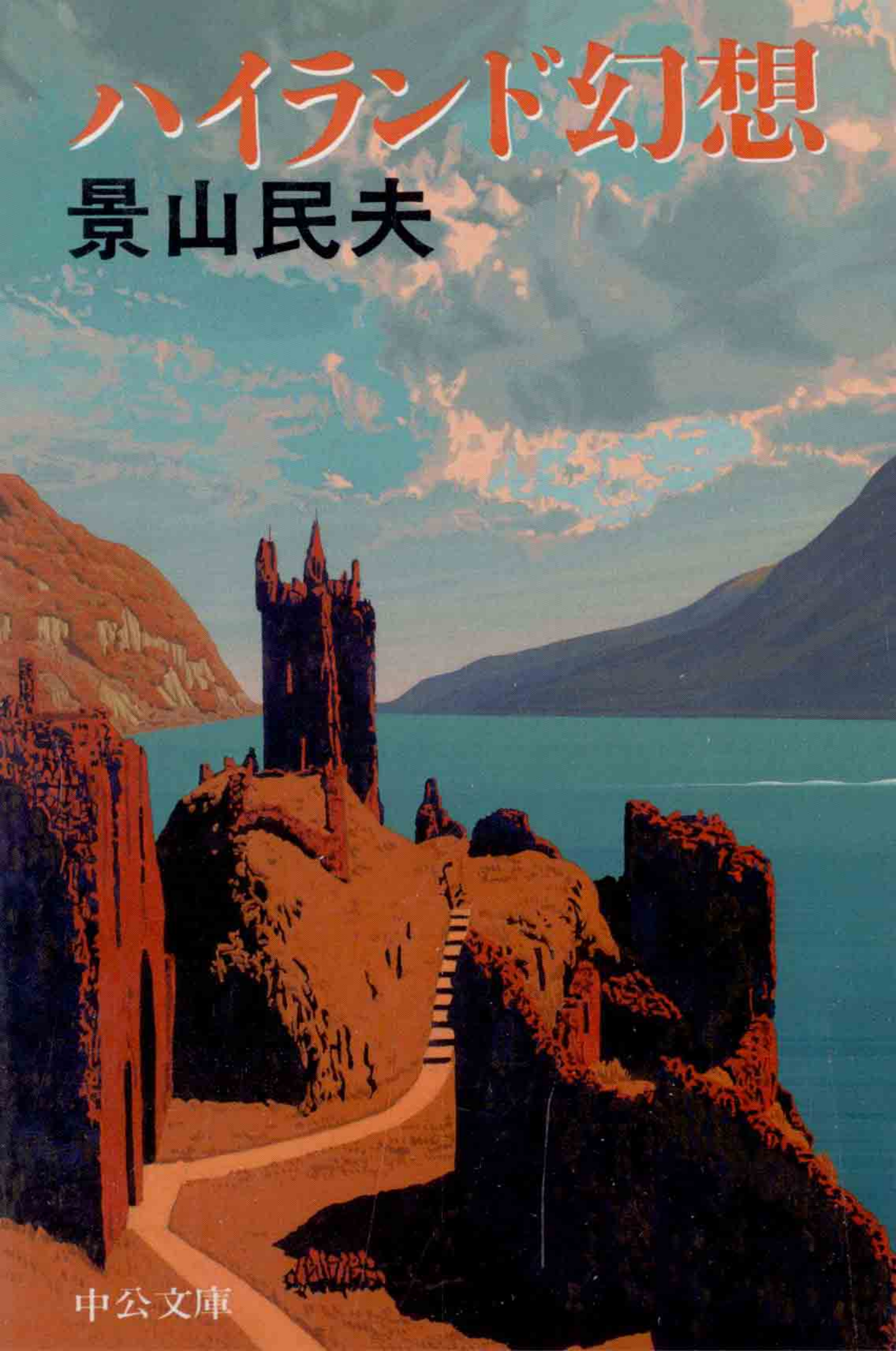
ハイランド幻想

景山民夫



中公文庫

中公文庫

ハイランド幻想（げんそう）

定価はカバーに表示してあります。

1997年12月3日印刷
1997年12月18日発行

著者　景山民夫（かげやまたみお）

発行者　笠松　巌

発行所　中央公論社　〒104 東京都中央区京橋2-8-7　振替 00120-4-34
TEL 03-3563-1431(販売部)　03-3563-3664(編集部)

©1997 CHUOKORON-SHA,INC. / Tamio Kageyama

本文印刷 大日本印刷　カバー印刷 三晃印刷　用紙 王子製紙　製本 大日本印刷
ISBN4-12-203011-0　C1193　Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

ハイランド幻想

景山民夫

中央公論社

目次

アイランド　7
バリ島綺談　41
私説　ジャイアント馬場伝　67
田中家の人々　79
主車選択　107

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

狸の汽車　125
地獄　151
誰かが見ている　171
ジャイアント殺人事件　183
ハイランド幻想　205
解説　みなみらんぼう　245

ハイランド幻想

アイランド

トニー・ボトムズが最初にその日本人の父子らしい二人連れを見かけたのは、リージェント・オブ・フィジー・ホテルのバーだった。

普段なら、仕事で客をピックアップしに来るのでなければ、そんな高級ホテルに足を踏み入れることなど無いトニーだったが、その日は観光シーズンを外れた十一月にしては珍しく仕事がたて込んで、少しばかり懐が暖かかった。最後にトレジャー・アイランドまでセスナで運んだアメリカ人の一行が、たっぷりとチップをはずんでくれたこともあって、気が大きくなっていた。ナンディの町の、インド人が経営する行きつけのバーのカウンターに寄りかかって生ぬるいビールを口に運ぶより、ホテルのカクテルラウンジで、ゆったりとしたソファに沈み込み、ジン&トニックを味わう方が、いまの自分にはふさわしいのではないかと考えたのだ。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

とはいえ、実際にそのカクテルラウンジに腰を据えてみると、そこは想像したほど居心地の良い場所とはいえなかった。まず、客が多すぎた。ちょうど夕方のホノルルからの直行便が着いた後で、チェックインしたばかりのアメリカ人団体客が、ラウンジの大半を占領して、ホテルのおごりであるウェルカム・ドリンクを飲んでいたのだ。六十歳以上の老人夫婦がそのほとんどを占めているアメリカ人たちは、大声で喋り互いに呼びあい、そしてカメラのフラッシュを光らせつづけた。

あいつら、結局はフィジーまで来たって、こういうアメリカ資本のホテルに泊まり、アメリカ資本の旅行会社のバスで島内を巡るだけで、絶対に俺の会社の飛行機でどこかの島まで飛ぼうなんてことは考えもしないのだからな、とオーストラリア人であるトニー・ボトムズは苦々しい表情でジン&トニックのグラスを干した。

タンカレイを使ったジン&トニックのお代りを、こればかりはここで飲むことにしてよかったと思わせるサロン姿の黒い髪のウェイトレスに注文して、ふとラウンジの一番奥に目をやったときに、日本人らしい中年の男と、少年と呼ぶにもためらうような線の細い感じを与える男の子という二人連れを、長いソファの外れに認めた。トニーが彼らに注意を引かれたのは、日本人らしいという理由からではなかった。数年前

に日本航空が直行便を飛ばすようになってから、このフィジーにもずいぶん日本からの観光客がやって来るようになったので、東洋系の住民の少ないこの国でも、さして珍しいというわけではない。それは確かに、日本人観光客の多くが新婚カップルや若い女性同士で、父子連れというのはあまり見かけはしないが、あるいは母親は部屋で休んでいるか、ホテル内のショッピングモールでもひやかしているのかもしれない。

トニーが彼らを見て最も気にかかったのは、男の子の表情の暗さだった。視線はテーブルの上の蘭の花に向けられていたけれど、彼はけしてその花を見てはいなかった。ただその方向に目を据えているだけで、明らかに何も見てはいない。手にしたコーラのグラスのストローを歯で噛みしめるようにして、顎を左右にゆっくりと振る動作を、ずっと繰り返していた。

父親に叱られでもしたのだろうか、とトニーはまず思った。だが、傍(かたわ)らの父親らしい男の様子も、けして一般の観光客のようではなく、時折低い声で男の子に短い言葉を投げかけては、返事が無いとみるとウィスキーのオン・ザ・ロックスらしいグラスに手を伸ばした。

二杯目のジン&トニックのグラスを傾けながら、トニー・ボトムズは日本人父子の

様子を、それとなく窺うことに熱中した。

まだ十歳にも達していないと思われる男の子は、父親の言葉に一切耳を貸さない様子で、相変らず焦点の合っていない視線を蘭の花に向けていた。男の子の肌は白く、その点だけとっても、フィジーに観光に来た日本人とは異っている。どんな子供だって、この島に来たらすぐさま海かプールに飛び込み、夕方には紫外線を充分に浴びた肌の色になっているものなのだ。

やがて、父親が何度目かの言葉をかけたときに、男の子は初めて蘭から視線を外し、父親の顔を睨みつけるように顔を上げた。それから、短く甲高い声で、トニーには判らない言葉を父親に投げかけると、男の子はパッと立ち上がってラウンジの外へ走り去った。父親は首を横に振り、ゆっくりとグラスの酒を飲み干してからテーブルの上の伝票にサインをして、男の子の後を追った。

それを見送った後で、トニーは三杯目を頼むためにウェイトレスに向かって手を上げた。

次に彼らに出会ったのは、ホテルのラウンジで見かけた四日後の昼下りのことで、トニーは中古のランドローバーを運転して、ナンディの町からラウトカ港の自分の航

空会社へ戻る途中だった。フィジーは乾季の終る時期にさしかかっており、その日も午前中にかなり激しいスコールが島の北西部一帯を襲ったが、その雨雲が通り過ぎると、太陽はいつもどおりの灼熱の光を投げかけ、気温はあっという間に摂氏三十度を超えた。そして、例の父子は、スコールで出来た水溜りから水蒸気が立ちのぼる湿度九十パーセントはありそうな炎天下の道端に立っていた。

父親がトニーのランドローバーに向かって右手の親指を突き出して振ってみせた。フィジーではヒッチハイクはバスに次ぐ二番目の移動手段となっている。鉄道が無く、タクシーも絶対数が足りないから地元の人間はほとんどが乗り合いで利用していて、道路を流しているタクシーというものには、まずお目にかかれない。そういった交通事情だから、一度でも顔を見たことのある人物が道端で親指を立てていれば、拾ってやるのが不文律のようになっているのである。そのせいか、この国の交通法規には乗用車の後部座席の乗車定員数というものが無い。拾えるだけ拾い、乗せられるだけ乗せて走る。ただし、この国でのヒッチハイクは無料ではなく、乗せてもらった人間はバス料金と同額程度のお礼を払うのが、これも礼儀となっている。

トニー・ボトムズはためらうことなくブレーキを踏んだ。

「何処(どこ)まで？」
「ラウトカの港へ行きたいんだが」
日本人にしては意外なほどキチンとした、しかしアメリカ風のアクセントの英語で、父親らしい中年男が言った。
「レンタカーのトラックが壊れた。さっきのスコールで排気管から水が逆流したらしいんだ」
「後ろから乗りな。俺もラウトカ港まで行くんだ。おい、そのチビ助(ショーティー)は助手席に乗せてやってもいいぜ」
トニーの言葉が理解出来たのかどうか、男の子は無言のまま、助手席のドアには手もかけずに、後部ゲートから父親につづいて乗り込み、後ろの席に腰をおろした。
「日本人かい？」と、車をスタートさせてからトニーが訊ねた。バックミラーの中で父親がうなずくのが見えた。
「日本人だ」
「前に顔は見てるよ。リージェントのバーだ。あそこに泊まってるんだろ」
「ああ、でも泊まるのは明日までだ」と、父親が低い声で答えた。

「ということは、日本に帰るのか」
「いや、私たちは日本へは帰らない。このフィジーに住むんだ」
その声が、意外なほど決意に満ちていたので、トニーは一寸驚いて、またバックミラーを覗き込んだ。
「住むって、このビチレブ本島にか？　日本航空にでも勤めてるのかい」
「この島じゃない。もっと小さな島だ。ヤサワ諸島にパゴパゴって島がある。そこに住むんだ。もう家も建てた。ほとんど完成している」
「おいおい、パゴパゴってのはフェリーも通ってない、どうしようもなく辺鄙な島だぜ。第一、ラウトカ港からスピードボートで三時間以上かかる。あんな所、住めやしないぞ」
「住んでいる人間もいるさ」
「そりゃ原住民だ。日本人にゃ無理ってもんじゃないのかな」
「フィジアンも日本人も、人間であることには変りはない。私はパゴパゴ島に住むことに決めたんだ」
父親がそう言ったとき、男の子が、ホテルのときと同じような高い声の日本語でな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com